

# マッド（ドS?）な主人公のちょっと過激な原作救済

くうねるところの音楼

これは、少年少女の物語。誰かしらが心に闇を抱え、それでも前に進もうとする、そんなお話。

家族と隔たりができ、自分の殻に閉じこもって、それでも足掻こうとするであろう少女。

—— ああ、いいね、お前のその表情。実にそそられる——  
家族があるとある会社の社長で自分はご令嬢。親にまともに甘えることも出来ず、それを発散するためにつしか周りの殆どを敵と捉えてしまうであろう少女。

—— オレはオレの親しいヤツの恐怖に歪んだ顔や、その綺麗な顔が涙や鼻水に汚れてみっともない事になってるのが見たいだけなんだ。絶望？ それもいいが、そんなの乗り越えられたらつまらないだろう？ それに、そんなものを与えてしまったら「親しいヤツ」じゃなくなってしまふじゃないか——  
自分が特異で、家族も特異で。それをしたくないのに、しなければ生きていけないくて、絶望に駆られるであろう少女。

—— オレ以外のヤツの所為でオレの親しい奴の顔が歪められた？ ハッ！  
上等だ。ソイツには絶望なんて生温い、死にたいと思うような地獄を見せてやる

よ!!

母親に生み出され、虐待され、それでも母親のために頑張ろうとして、真実を告げられ絶望してしまふであろう少女。

—— 仲直り? …… そうだな、相手が可愛くて虐め甲斐のあるヤツだったら、出来んじゃないかねえか? クハハハッ ——

親代わりはいるが家族はいなくて、自分一人が住むには大きすぎる家にいるのは決まって自分とヘルパーの人だけ。寂しさを抱え、家族を欲し、それでもそんなことを臆面にも出さないで今を生きるであろう少女。

—— …… ああ、クソツ…… いいよ。オレがお前達を救ってやる ——

ああ、なんて世界は不平等なんだろう。

おや? ここにもまた一人、そんな闇を抱える子供が ——。それも、闇の所為で酷く心が歪んでしまっているようだ。ああ、不平等だ。だが、不平等が折り重なれば平等になるのではないだろうか?

だから行きなさい。アナタというイレギュラーで、彼女達に平等を。そして、彼女達からは優しさを ——。



# 目次

転生初日！	1
神様転生 in リリカルなのは！……………	1
家族として最高に最低だな、オマエ等。 1・高町桃子……………	11



転生初日！

神様転生 in リリカルなのは！

続かない……と思いますが、精一杯頑張るのでどうかよろしくお願いします！  
あ、酷評ください。参考というか、勉強になりますので。

因みに作者はオリハルコン並みのハートです。とはいっても、あまり強い酷評は見る人によっては不愉快になるので、活動報告の方に酷評感想用の場所を用意いたしましたので、よろしければそちらへお願いいたします。

3513・06・28 ?? ?? 神ノ間某所

「……これはまた……はあ。下界は物騒になったものだな。昔はまだほかの異世界から楽園とされていた地球も堕ちればこの程度か」

「どうなさいました？ ○○○様」

「んあ？ あー、お前か、ルシファー。ま、ちょっとな。今回の患者は重症ってだけだ」

「……患者？ またあなたは……もっと神としての自覚を持ってください。大体、今の地球の人間だったものを助けてなんになるって言うんですか」

「ま、なんにもなんねえけどよ。只の暇つぶしだ」

「もう今更あなたに何を言っても手遅れのような気がします、今回でその愚行はやめてください」

「わあったわあった。気をつけるよ」

「分かればいいんです。それで？ 今回は私も手伝いましょうか？」

「……ツンデレめ」

「あ？」

「……ああ、手伝ってくれるとありがたいがてえな、女神さま」



目が覚めたら完全無欠の異世界でした——ってか？　ハッ、笑えねえ冗談だ。

たしかオレは、あの時死んだはずだ。なのにこうして生きてるってこたア……ま、十中八九転生か。前々から結構規格外だとか言われてたが、ここに来て漸くその意味がわかったな。オレだけが特別ってより、その特別の中の一人だったってだけなんだろうけどな。

にしても、ここは住宅街か？　それにしちゃ人気がねえな……。

あまり高いビルはねえし、あるとしても三〜四回建てのマンション程度。

……あまり都市部じゃねえってことか。

取り敢えず散策すつか——ん？　ああ、その前に“アレ”がちゃんと使えるか確認しなきゃな。

「直死の魔眼」

……よし、出来た。ちゃんと視えてる。って、あれ？　おかしいな。なんで空間にまでツギハギが出来てるんだ？　空気や何かはモノじゃなかったはずだが……まあ、いいか。今考えても答えは出ねえだろうし。

当初の予定通り散策しよう。そうだな……今日の前に見えてる公園にでも行ってみっか。

楽しそうな、予感がするしな。

夕暮れ時、とある公園の中で少女が一人ベンチに座っていた。

周りの友達も帰ったのだろうか、本当にたった一人ぼつんと座っていた。

徐々に傾いて見えなくなっていく太陽に照らされた顔は浮かなく、まるで悲しみを耐えてるように歪んでいた。いや、歪んでるだけではなく、うっすらとだが涙も浮かんでいる。

それも仕方ないことか。少女の親はとある仕事に負傷し、入院しているのだから。

そして、家族は今父親がいないせいどころなく荒んでおり、姉と兄は剣術の修行を、母は父と経営している店の仕事に追われている。今の少女の心境に気付けるものは家族にはいなかった。

少女は今日決心するはずだった。家族に迷惑をかけないように良い子になろう

と。だってそうすれば、もしかしたら父親も帰ってきてくれるかも知れないのだから。迷惑をかけない……それは、我が儘を言わない、親の前では泣かないと、普通の子供が決心するようなことではなかったが、幸か不幸かこの少女の精神は周りより少しばかり成長が早かったのだ。だから決心できた。出来るはずだった。いや、  
“原作”では決心しているのだから、出来ないわけがない。だが、一人の乱入者によってその決心が出来なくなってしまった。

少女が決心しようとちょうどその時、公園に入ってくる人影が見えた。少女は反射的にその人影の方を見る。

入ってきたのは少女より少し年上程度の少年だった。外見では少年だとは分からなかったが、雰囲気がそうだと感じさせた。

腰まで届くような長い髪は艶々の漆黒で、身体付きはどちらかと言うと華奢だ。だが顔は、見たものが目を離せなくなるだろう綺麗な顔は、愉悦に歪んでいた。

それに対し少女は本能で危機を察し身を固くする。恐らくそのことに気付いているであろう少年はそんなことを気にしないというふうにな少女に歩み寄り、目の前に立った。

口元を三日月型に歪め、目は何処か獲物を見てるかのよう鋭く少女を見る。

そして、少年が口を開いた。

「ああ、いいね、お前のその表情。実にそそられる。ただ解せないのが、その顔をさせている根本的な要因はオレ以外の誰何にあるってことだな」

そう言って少年はまた少女の顔を見る。

そしてまた口を開いた。

「ほら、話してみろよ。話してみたら少しはスッキリするかも知れないぜ？ 何より、オレ以外の奴が要因で出来たその顔を見てるのはすごく腹立たしいからな」その言葉を聞いた瞬間、自分でも分からないが、何故か口を開いて今まで悩んでいたことを打ち明けていた。

はあ……魅了の魔眼が想像以上に効いたな。ま、そのほうがオレとしてはちょうどいいからいいんだけどな。

……この少女——本人曰くなのはの話を要約すると、父親が瀕死の重傷を追って、母は仕事に追われ、兄と姉は剣術に明け暮れるようになった……と。

そして、今ちょうど「良い子」になるという決心しようとしていたらしい。そのことを話している時に恨みがましい目で見られたが、知らないよそんなこと。オレは楽しそうだから話しかけただけなんだからな。

にしても……ああ、そうか。こいつは自分から壊れようとしてたらしい。ま、そう考えれば今オレが来てちょうど良かったというべきか。壊れた人間なんて虐め甲斐がないし、何より見てて気持ち悪い。同族嫌悪だ。

ああ、そう言えば。オレの趣味って誰かを虐めて楽しむことなんだよな。そのせいで友達っツーカーか、親友って言える奴が数人しかいなかったからな。しかも全員キワモノ。アーパー吸血鬼に殺人貴、空に蛇に黒猫と白猫。そして魔術師姉妹。ああ、たしか混沌なんかもいたな。ま、その程度。

っと、オレのことは置いといて。

そうだな……今コイツを助けて、その後友達になったら虐め倒そう。うんそうしよう。

そうなるとコイツにかける言葉なんだが……オレは誰かを助けたことなんてないからなあ。結局あいつらは自分で乗り越えてるわけだし。だからこう言う相談に乗

るってのは苦手なんだが……今後の自分の娯楽のため、頑張るか。

「ど、どうしたの……?」

「ん? ああ……ちょっと考え事してただけだ。そうだな……普通に甘えればいいんじゃないか?」

言って、自分がこんな臭いセリフを吐いてる事に苦笑する。

ああ、全く。オレのキャラじゃないよこんなの。これは……そう、殺人貴とか、そういうのがすればいいんだ。どちらかといえば空に似てるオレがすることじゃない。

「え?」

「え、じゃないよ。甘えればいいんじゃないかって言ってるんだ。子供は親に迷惑を掛けて良いんだ。逆に、心配をかけない子供は不気味に映る。だから普通に甘えればいい。」

ほら、オマエの……なのはのお母さん達は、我が儘を言って困らせたとしても、決して嫌な顔はしなかったんだろう? 憶測だけだな」

「う、うん……でも、今まではそうかもしれないけど、今はお母さんもみんな、忙

しいから……だから、甘えちゃダメだって——」

「それはなのが勝手に思ってること。お母さんの気持ちは分かんないだろう？ 一回、向き合って話し合ってみろ。分かり合えるかも知れない、怒られるかもしれない泣かれるかもしれない、でも一歩前進できる。不安だったら、オレも一緒に行ってやるぞ？」

「——」

絶句、これが今のこいつの状況を表す最適な言葉なんだろうな——なんて考えながら、思考が停止しているであろうなのはを急かす。

待たせるのは良いけど、待たされるのは嫌いなんだ。

「ほら、どうする？ 向き合ってみるか、自分の憶測だけで殻に閉じこもるか……  
選択はオマエ次第だ」

「……だいじょうぶ、かな……？ 迷惑じゃないかな？」

「だからそれを今確かめに行くんだろ？ ほら、行くなら行く。グズグズするな」

「……えっと……一緒に、きてもらって……いいかな……？」

「ん、じゃあ今から行くか。立てるか？」

「うん！」

改めて思うが、やっぱり直死の魔眼より魅了の魔眼の方が有効活用が出来る。

さて、オレに何が出来るかなんてわからないが、適当にやっけていくか。

ああ言った手前、何もしないなんてできないしな。

転生初日、良い遊び道具が見つかった。

……さて、酷評、お願いします。あ、だからといってよかったよ〜っていう感想がいらぬというわけじゃないですよ？（チラチラ

書いて個人的な事を言うとは、ネタは思いつくけど言葉に出来なくてイライラしますね。何十話も書いてる作者様方には尊敬の念しか浮かびません。

今回は12月13日にはだそうと思います。よろしくお願いします。

## 家族として最高に最低だな、オマエ等。 1・高町桃子

12月13日までには上げるといったな。アレはウソ——ってごめんなさいごめんなさい！ ジョーク！ ちょっとした冗談ですよ！

まあ、急遽暇が出来てしまい、あと感想がもらえたのが嬉しくて書き上げました。前日も言いましたが、酷評ください！ 酷評じゃなくてもここはこうした方がいいなどのアドバイスでもいいです！ なんでもいいのでください！

公園から出てなのはの家に向かう途中、オレとなのはは少しだけ話しをした。話し、なんて言ってもなのはの家族の話しなだけだな。

なんでも、なのはの父、兄、姉は剣術をやっており、それなりに強いらしい。何れ程強いのかは自分で戦ってみたいことにはわからないけど、一応目安としておこうと思う。

そして母は料理が上手で、今経営してる店——翠屋のものは殆ど母が作った

ものらしい。

ああ……今笑ってるその表情。鈍く酷く醜く歪ませてえな……。

ま、今は我慢だ。コイツの親に会って、ちよっと話をして仲良くなって、それからだな。まったくもって面倒くさい。そのあとに楽しみがあるから苦じゃねえんだけどな。

っと？ 誰だあれ。銀髪に……虹彩異色？ へえ、今時珍しい奴もいるもんだな。アイツは虐めても楽しそうな雰囲気じゃねえから構うことはしねえんだけど。

……いや、違うな。アレは構うとうざいタイプだ。蛇も蛇で構うとウザかったが、アレはただの自慢というか、自分の憧れてる、惚れてる相手がどれだけ凄いかというのを力説しているだけなのでまだ耐えられるんだ。たまにその中からあのアーパー吸血鬼を弄る種が見つかるしな。

けど、アレはダメだ。よく言う俺様タイプ……何もかもが自分の思い通りになると過信して周りの話を聞かずただただ我が道を行くってだけのタイプだ。オレは、ハッキリ言うところというタイプの人間は嫌いだ。嫌悪してるといってもいい。だか

ら構わないようにしよう。日本の諺にもあるが、触らぬ神に祟りなし。触れなければ害はないんだ。

「どうしたの……?」

「別に、何でもないよ。ただ、ああいうタイプの人間は近寄らないほうがいいなって思っていただけだ」

「ああいうタイプって……あの見た目がかっこいい男の子のこと?」

「かっこいい……? ああ、まあ容姿だけ見ればかっこいいと言えなくもないか。七夜を知ってるだけに、どうも見劣りするんだよな……」

言われて気が付いた。アイツ、世間一般では整ってる顔の奴だ。殺人鬼の片割れの方はかなり顔が整っていたし、周りに美男美女ぞろいだったから少し感覚がマヒしてたな。

……そうだな。王様系の奴が屈辱に震えながら立ち向かってくるさまは……さぞかし楽しそうだ。気が変わった。後でなのは件の件が終わったらあいつに話しかけてみよう。

なんてことを考えていたからか、随分と早く着いたな、翠屋。

「えっと……ここがわたしのおうちなの。でも……だいじょうぶかな……迷惑じゃないかな……」

「ああーもう。ウダウダ言っただけでねえではいるぞ。迷惑か迷惑じゃないかなんてやっただけに考えればいいだろ」

「いや、それはさすがにダメだと思う」

「いいから、さっさと入りやがれ。オマエが入らないとオレが入れねえだろうが」  
「う、うん……わかった……」

ここに来る途中、話してる合間に何やらいろいろ考えてるなと思ったら、そんなこと考えて嫌がったのか。それで、打ち明ける覚悟が揺らいでしまったと……ガキか？ いや、ガキか。

ま、それはいいとして……外から見ると古っぽそうで結構厳かな雰囲気を出してるが、中々どうして、中は綺麗じゃないか。この店の窓際に座ってコーヒーと甘味のものさをさぞ美味しいんだろなとオレにも思わせるだけの雰囲気があるな。なのはが言っていた繁盛している、っていうのも案外間違いじゃないのかもな。

っと、奥から人が出てきたな。あれは……ああ、母親の方か。私服に着替えて片

腕に手提げ鞆を持ってるところを見ると……今から帰りか。ちょうどいい、気配からして中には他に誰もいないだろうし、家に帰るのについて言って全員の前で話させるか。

「あら、なのはじゃない。どうしたの？ それと、その女の子は友達？」

……OK。どうやら死にたいようだ。予定変更、徹底的に精神を痛めつけてやる。覚悟してろよ……？」

「ち、違うよお母さん。この子は男の子だよ……？」

「あら、男の子？ そうは見えないくらい綺麗な子ねえ……。っと、そういうえげなのははどうしたの？」

「あ、えっと……うーん……」

……それは今はいいとして、コイツ、話しがコロコロ変わりやがる。面倒くせえタイプのやつだな。いや、疲れてるからそういう感じになってるだけか？ よく見ればうっすらと目の下にクマが出来てる。それほど疲れがたまってるだろうなあ……ま、容赦してやる気には毛頭なんないけど。

それにしても、まだなのはに話題を切り出させるのは早い。帰ってからにしない

と全員に聞かせられなくなるかもしれないからな。仕様がな。ここは、少しオレが助け舟出してやるか……。

「こんにちは、なのはのお母さん。あぁー……」

「あら、こんにちは。私は高町桃子よ。貴方は——」

「ああ、桃子さん。今回オレがついて来たのは、アンタ達に少し重要な話があるからなんだ。ま、別に聞かなくてもいい。ただし——」

——なのはがどうなってもいいのなら、な？

桃子が何か言う前に、オレのペースを維持させながら近づいて桃子にだけ聞こえるような声音でいうと、桃子は一瞬だけ体をこわばらせた。ま、本当に一瞬だけ見てるこっちとしては本当につまらないのだが。

ついでに目も合わせている。魅了の魔眼だ。ホント、これにはいつも助けられている。なにせ、オレの魅了はあのO R Tや全盛期のアーパー吸血鬼に荒耶などにも効いたのだから。まあ、荒耶は兎も角O R Tとアーパー吸血鬼には数分しか効果が無かったが。人の身でこの身に届いたこと、賞賛に値するとかどっちかに言われたっけ。だから大抵の修羅神仏悪鬼羅刹には聞く自信はある。現に、今オレの目の

前にいるコイツはもうかかっている。

といつても、ちゃんと制御してるから意識を乗っ取るかそう思わせるか程度に使い分けることができる。今回のなのはやコイツに使ったのはそう思わせる程度の効果だ。だから今頃、コイツの頭の中ではオレに惨殺されるなのは姿でも写ってんだろうなあ……っ！ いいね。実に良い。親しくない奴でも、ここまでわかりやすく顔に出されると愉悦を感じるよ。

「……わかった……わ。家には、恭也と美由希も、いるでしょうし……」

「ん、了解。というわけだよなのは、早速家に向かおうか」

「え、え？ ふえ……？ えっと、何がなんだかわかんないよう……」

「クハハッ、わかんなくていいよ。ほら、行くぞ。オレは場所知らないから案内してくれよ、なのは」

「ううー……うん、わかったの……」

……む。やっぱりなのは勘が鋭いみたいだな。どことなくオレが何かしてるってのを本能で察知してやがる。いいね、ますます楽しくなってきた。ああ、早くなのはの家につかないかな。楽しみだなあ……なのはの家族の顔が歪んで、そして更

にそれを見てなのは顔が歪む様子がみてみたい。っと、それはまだまだ後だった。楽しみだなあ……。

初めてその子供を見た時は、ああ、またなのはが友達を連れてきたのかな。っと、それだけだった。

元々なのは元気が良く活発で、友達がすぐ出来るような子だった。最近は何故か友達と遊んでるところを見ていなかったから、こうして友達を連れてきてくれたことに少しだけ安堵していた。

だが、それは間違いだった。この子はなのはの友達ではなく、なのはを害す毒だったのだ。

気付いた時にはもう遅かったのだと思う。その子が話しかけて言葉に詰まったとき、好奇と違って名前などを聞こうと思ったが、聞けなかった。更には、主導権を完全に握られ、手のひらの上で踊らされていた。

そして、その子が言った、なのはがどうなってもいいのなら。という言葉に、頭

が真っ白になったような気がした。そして次の瞬間には、頭の中でなのはが惨殺されてる姿や、女性としての尊厳をめちやくちやにされてる光景が浮かんでいた。そんなことを考えたあとでは、頷くしかなくて。自分でもわからないまま私はその子の言葉に了承をしてしまっていた。

二話目……むう。やっぱり想像だけが先走りしてるような……。

でもまあ、はい。楽しんでいただければ幸いです。

あ、やっぱり酷評くださいなっ！ あ、予約投稿つてのをしてみました。なんか楽しいですね、こう……読み専だった作者がこうしていろんな機能を使って小説を書いたり投稿したりするの！（ふんすっ

追記…次の投稿は来週の土曜日か水曜日にします。

# マッド（ドS?）な主人公のちょっと過激な原作救済

---

著者 くうねるところの音楼

発行日 2022年3月23日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/39269/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。